

第3章

外国人住民の世帯・世代ごとの姿と地域でのつながり

【調査概要】

- 調査件名 横浜市中区委託「令和2年度中区外国人意識調査業務」
- 調査期間 2020年10月から12月まで
- 調査方法・サンプル数 中区在住・在勤の外国につながる方を中心に、計24名へのヒアリング調査
- 国・地域別分類 13か国(中国・台湾(計9名)、その他アジア(7か国、計11名)欧米その他(4か国、計4名))

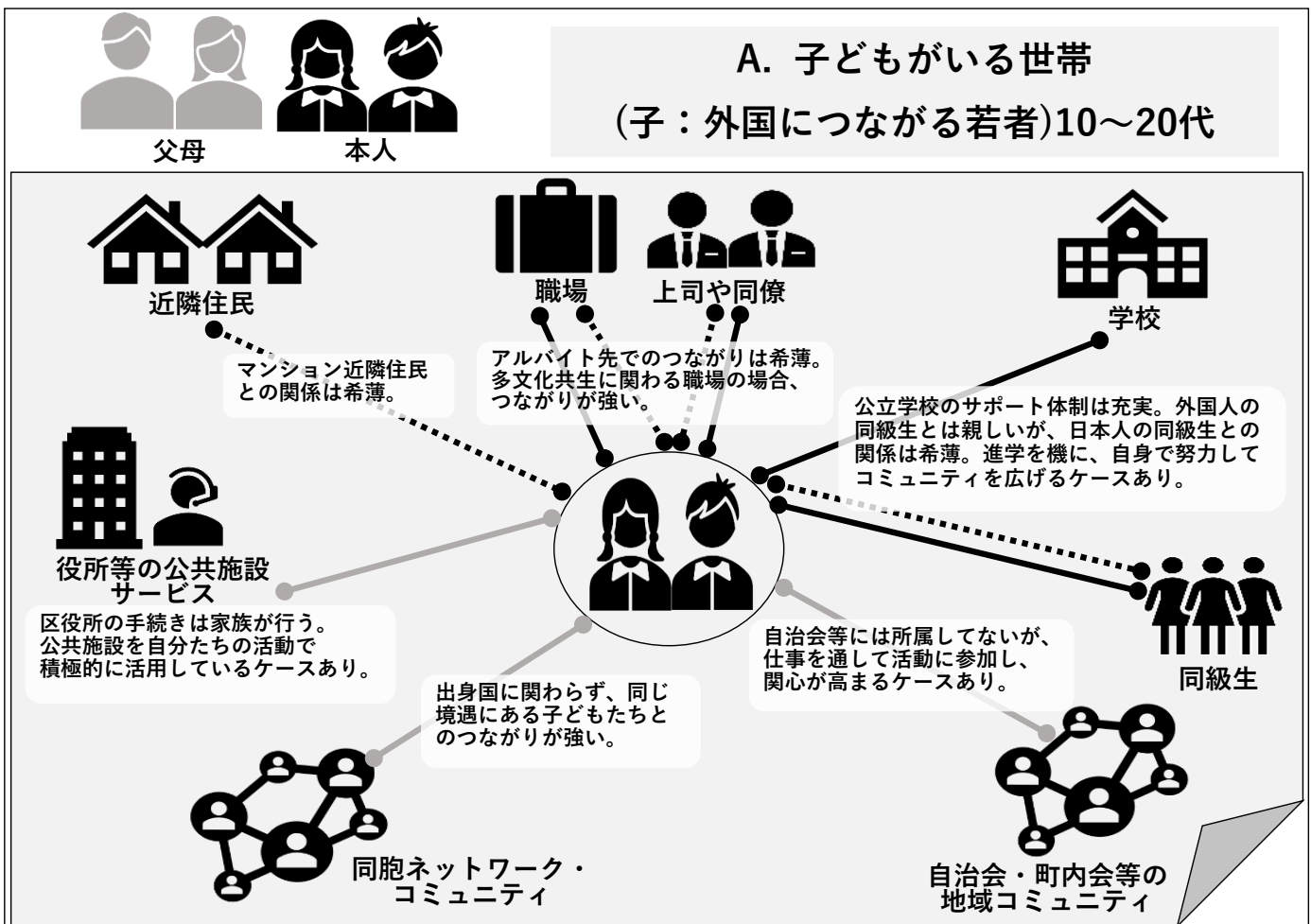
【凡例】社会資源とのつながりの傾向を以下の線で示す。

- ・ 全体的につながりはありません。
- ・ つながりが見られるが限定的／人による
- ・ つながり比較的しっかり／つながりがある人が大半

【主旨】

横浜にはさまざまな経緯や状況のもと外国籍の方々が住んでいます。ここでは、インタビューに応じてくれた方々の生活・仕事・学び・つながりなどの実情や心情を世帯構成別に5つのモデルにまとめました。

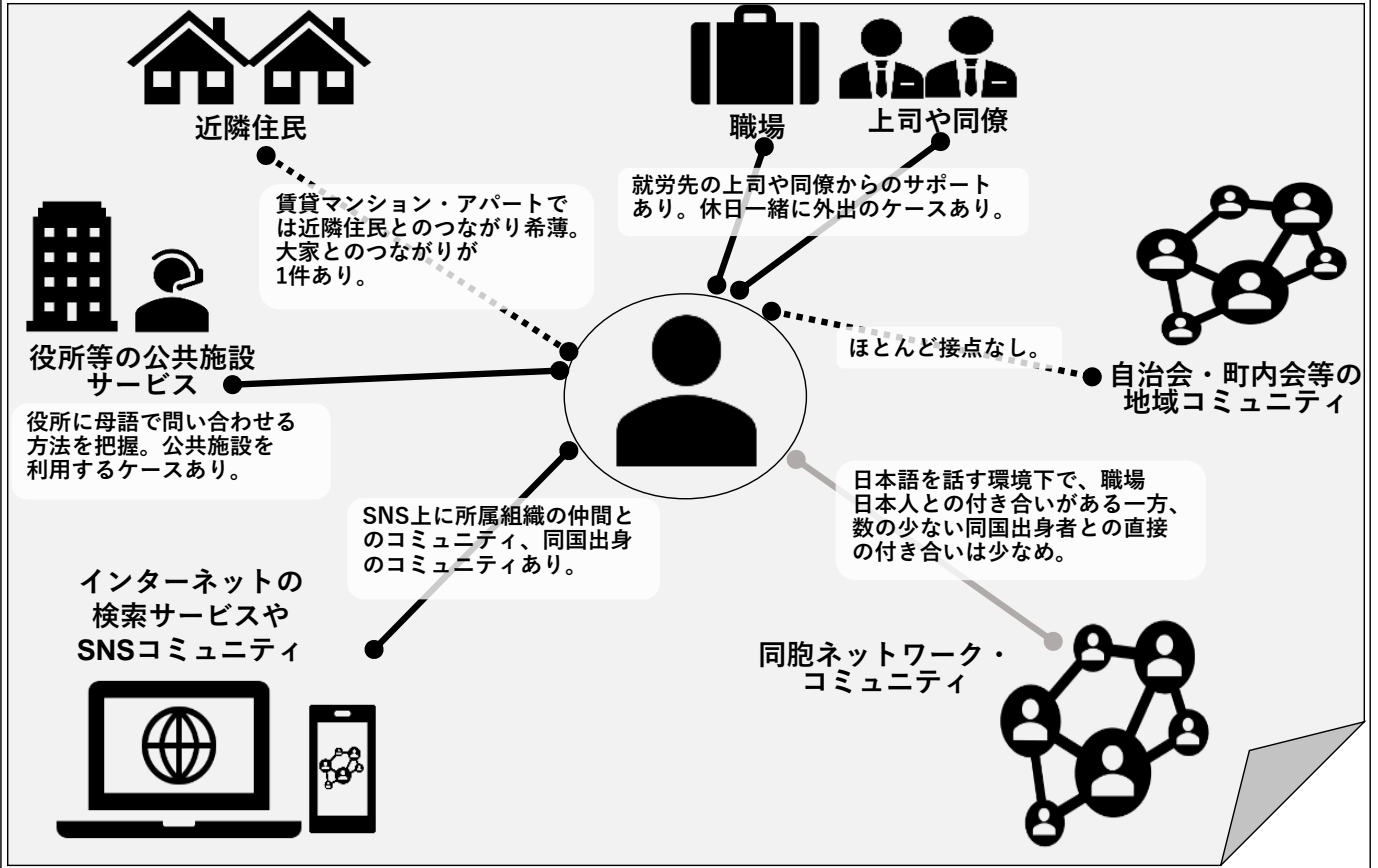
※これは中区の一部の外国人を対象にした調査です。





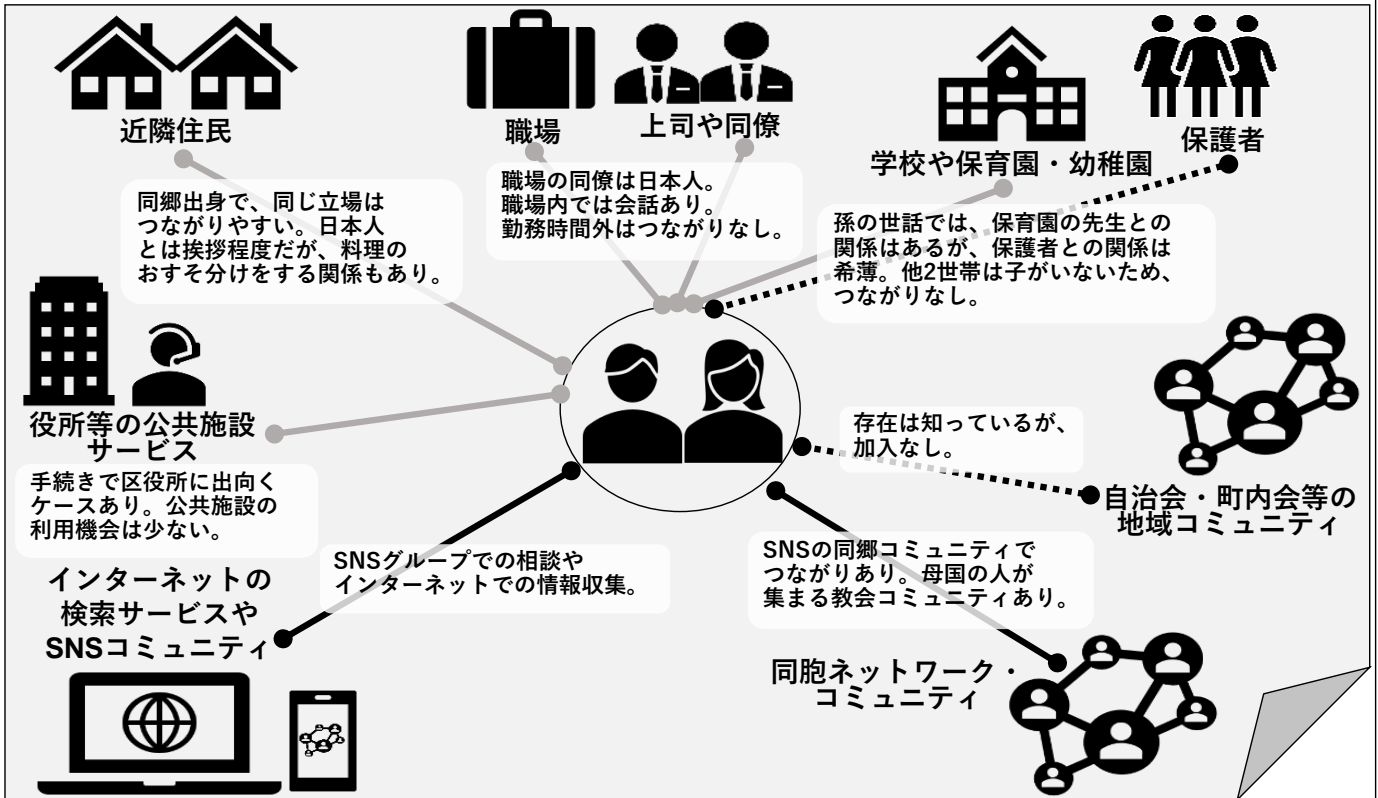
本人

B. 単身世帯 20代



夫または妻

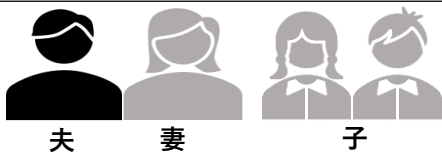
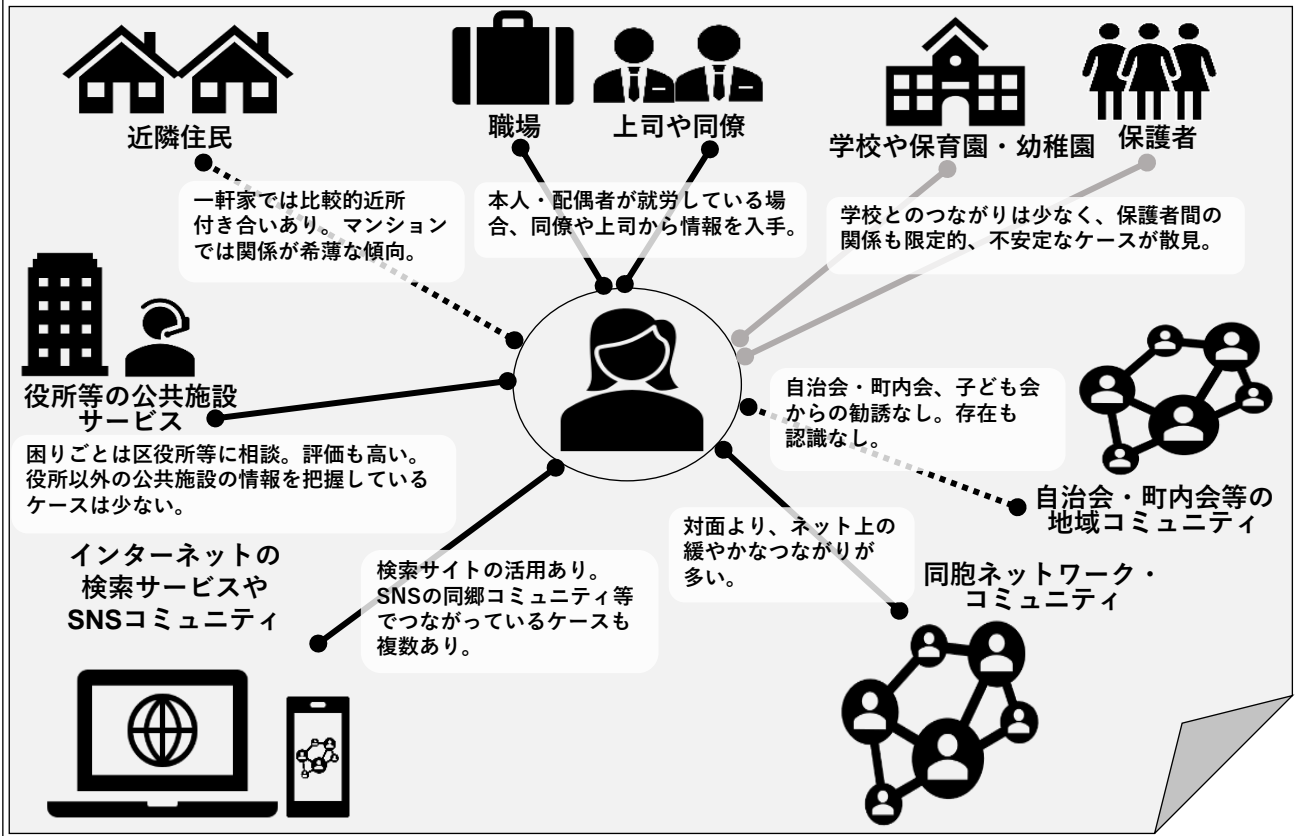
C. 夫婦世帯 30~70代





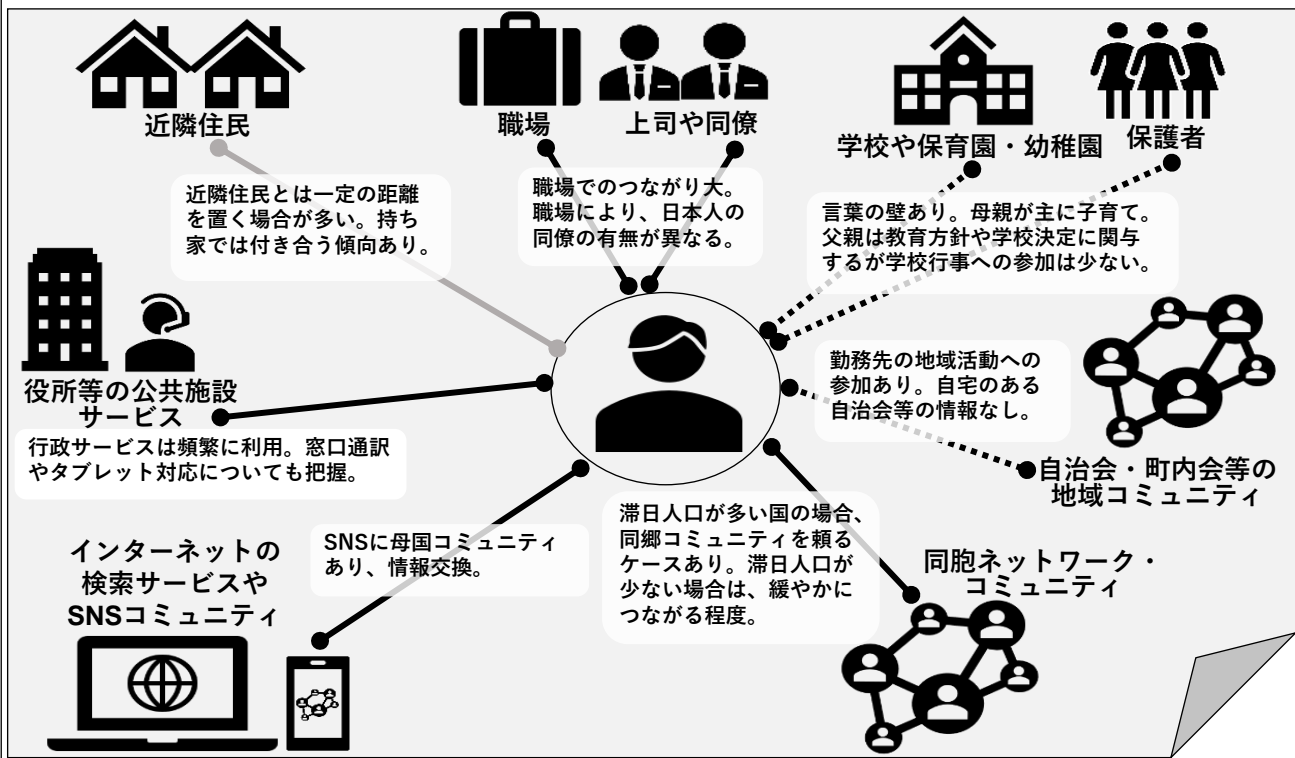
D.子どもがいる世帯（母）

20～40代



E.子どもがいる世帯（父）

30～40代



【調査分析概要】

1 近隣住民・地域コミュニティ

- ・いずれの世帯においても、外国人は近隣住民や地域コミュニティとのつながりが薄い。

2 学校・保護者・同級生

- ・子どもに対しては学校からのサポートはあるものの、学校と保護者との間や保護者間では、言葉の壁によりつながりに不安がある。また、子ども同士では日本人と外国人の間でのつながりが薄い。

3 役所等の公共施設・サービス

- ・区役所について頻繁に利用するケースが多い。公共施設の利用は世帯によってまちまち。

4 同胞ネットワーク・コミュニティ

- ・同郷のネットワークが形成されており、そのコミュニケーション手段としてSNS等を活用している。

5 職場・上司や同僚

- ・学生アルバイトでは対人関係が希薄であるが、常勤先では会話もあり、情報を入手している。

【世帯ごとの特徴】

A. 子どもがいる世帯（子：外国につながる若者）10～20代

- ・日本育ちの若者は、日本語習熟度は高いが、学校やアルバイト先で言語や文化の壁を感じ、差別的経験をしたり、「言葉の壁で何もできず挑戦できなかった」という声もある。
- ・なかラウンジに通う若者は、自らの経験をもとに外国につながる子への支援意欲がある。

B. 単身世帯 20代

- ・来日前後から日本語を学び、言葉の壁は少ないものの敬語の理解は難しい。
- ・外国人と地域の架け橋となる人もいて、双方の課題を客観的に把握している。
- ・日本語学習や会話、交流のニーズがある。生活満足度が高く、将来も日本在住を希望している。

C. 夫婦世帯 30代～70代

- ・子ども家族の生活サポートで来日した親（いずれ帰国予定）の日本での生活満足度は高い。
- ・地域活動に参加していない世帯では、家族内で情報を共有したり相談したりしている。
- ・職場の日本人とは交流があるが、言語の壁で日常の話し相手がなく寂しい思いもする。日本語の習得意欲は高い。
- ・日本語教室が交流の場となり、友人ができるなど生活の楽しみとなっている。

D. 子どもがいる世帯（母）20～40代

- ・日本語の理解が生活に影響している。日本語学習や就労の意欲は高い。子どもへの日本語教育にも努めている。
- ・幼稚園や学校における母親の役割負担が大きいと感じている。外国出身者どうしの情報交換が多い。
- ・自治会やPTA活動は壁が高いが、近隣の誘いなどにより参加し世界が広がったという声もある。
- ・子どもの成長後、ボランティアやサークル活動に参加する人もいる。その際、文化の違いを経験した人もいる。

E. 子どもがいる世帯（父）30～40代

- ・自らの意思により来日。言葉の壁などで苦労している子どもに悪いことをしたと感じている人もいる。
- ・仕事が忙しく日本語学校に通えなかったり、同郷が多い職場では日本語の使用機会が少ない。
- ・日本に愛着を持つ長期生活希望者が多い。在留資格の変更や住宅の購入、店舗の経営に対する制度などに苦労している。



こうした方々や周囲の方々を支え、一人ひとりが生き生きと持てる力を発揮できるよう、YOKEはその役割を果たしていきます。